



おふれうつし
⑬ 〔御触写〕 (部分)

天明4年(1784)5月8日

浅間焼け被害を起因として発生したその後の飢饉(天明の飢饉)は、疫病の流行をもたらしました。この史料は飢饉による疫病に対処するため、幕府が代官に宛てて発給した、薬の処方に関する通達の写です。享保の飢饉の際に出されたものを再び触れ出したものと考えられます。浅間焼けが天明の飢饉をもたらしたことはよく知られていますが、泥入り・飢饉と関係した疫病に対して幕府が具体的に処していたことを伝える貴重な史料です。

天田壮家文書 P08105 No.1036

【史料⑬】〔御触写〕天明四年

〔読み下し文〕

時疫流行候節、此の薬を用いてその煩わづらいを遁のがるべし

一時疫には大つぶなる黒大豆を能く煎いりて壺合

甘草壺つぼ水にてせんじ出し、時々とき吞のみてよし

右医渥わかに出る

一時疫には茗荷みょうがの根と葉をつきくだき、汁を

とり、多く吞のみてよし

(P08105天田壮家文書No.1036)